

(城西人文研究第 21 卷第 2 号)

アンドレ・ジッドの方法 XI

—『インモラリスト』—そのマニュスクリを追って—

鈴木 たけし

方法 X に続き、ジッド『インモラリスト』のマニュスクリを少しずつ追っていく。

今回は、第一部，I，pp.17-20 に限らせていただく。導入部の総理大臣 D.R. 氏への手紙の終り、「夜になった，そのときミッシェルは言った…」を受けて，彼の物語が始まる部分である。要約すると次のような内容となる。

ミッシェルは，もはや越え難い人生の極点にいる。そのゆえ，友人達に話すことだけが彼の救いになるとうったえる。

話は，友人達との最後の出会い，ミッシェルの結婚式から始まる。この結婚について，彼の印象はおざなりで消極的だ。彼は感動する，が，それは人々が感動していたからで，新婚旅行の車は，習慣としてのみ，人生の出発のイメージとなった。

ミッシェルが結婚したのは，単に死期の近い父を安心させるためであった。彼は，彼女を本当には知ってはいないし，愛してもいない。けして他の女をかつて愛したことはなかったのだから，それだけで二人の結婚に充分だと冷たく言う。

宗教に関して，彼の父は無神論者であった様だが，母は新教徒だった。彼女は，息子に厳格なユグノーの教育をした。彼女の死後，そのモラルはうすれていったが，研究に対する彼の熱意として，形をかえてのこった。母に代った父は，彼の教育に専念する。20 歳のとき，父の名で論文を著わし，大きな称賛を得た。しかし，この“ペテン”による成功に彼は混惑した。

廃墟と書物だけしか見ず、人生について何も知らずに 25 歳を彼は迎えた。たとえば友情は、心の高貴さの必要からにすぎない。友について何も知らず、我についてさえ何も知らない。違った存在、異なる人生という考えが、彼には欠けていた。

1. テキスト分析

マニユスクリとテキストとの比較に入る前に、テキスト自体の分析をとおして、その特色を明らかにしたい。作者自身が意識的にしろ、無意識的にしろ、テキストとして完成させたものが何であったか、まずはみたい。

このテキスト部分の特色として、並置された語、句、文が目につく。それも、同種・同意の語、句、文の並置と、反対の意味をもつ語、句、文の並置にわけられる。

ページ数、行数は、拙論末のテキストのものである。行数は、短文のばあい、冒頭のみ示し、長文のばあい、はじめと終りの行を示した。

(1) 同種、同意の語、句、文の並置

p.18, l.22 un court repas, sans rires et sans cris

笑いもなく叫びもない短い食事

p.18, l.26–27 Je connaissais très peu ma femme et pensais…qu’elle ne me connaissait pas plus.

私は、彼女のことをほんのわずかしか知らないし、思うに、彼女の方も私のことを知らない。

p.18, l.34–35 Si je n’aimais pas…ma fiancée, du moins n’avais-je jamais aimé d’autre femme.

私がフィアンセを愛していないとしても、少なくとも私はけして他の女を

愛したことはなかった。

p.18, l.37-38 Elle était orpheline aussi.

(若いとき母を失なったミッシェルは、父もなくしたばかりだが) 彼女もまた孤児であった。

p.19, l.44-45 le prêtre m'accepta; moi j'acceptai le prêtre.

司祭は私を受け入れた。私も司祭を受け入れた。

p.19, l.45 sans impair

(意味は, sans maladresse だが, 奇数でない, すなわち偶数pair と考えれば, 並置である。)

p.19, l.57-58 le latin et le grec...l'hébreu, le sanscrit...le persan et l'arabe

(父の指導をうけてミッシェルが学んだ言葉は) ラテン語とギリシャ語...ヘブライ語, サンスクリット語...ペルシア語とアラビア語。

p.19, l.59-60 Il s'amusait à me prétendre son égale.

彼(父)は, 私を対等のものともみなしてよろこんでいた。

p.19, l.66-67 n'ayant presque rien regardé que des ruines et des livres

廃墟と書物以外, ほとんど何も見なかったので,

p.20, l.71-72 Au demeurant, j'ignorais mes amis comme je m'ignorais moi-même

つまるところ, 私は, 友人達のことすら知らずにいたし, 同様に, 私自身の

ことさえ知らなかった。

(2) 反対の意味をもつ語、句、文の並置

pp.17-18, l.12-13 Je vais vous raconter ma vie simplement sans modestie et sans orgueil.

私は、私の人生を、控え目でもなく、傲慢でもなく、唯素直にみなさんに語ろうとしている。

p.18, l.19-20 …l'excellence des amis faisait de cette cérémonie banale, une cérémonie touchante

友人達のすばらしさが、この平凡な儀式を感動的な儀式にした。

p.18, l.33 …sans rire, mais non sans grave joie

笑いはないが、大きな喜びがないでもなく。

pp.18-19, l.40-43 J'ai dit que **je ne l'aimais point**…du moins n'éprouvais-je pour elle rien de ce qu'on appelle amour, mais **je l'aimais** si l'on veut entendre par là de la tendresse, une sorte de pitié, enfin une estime assez grande.

私は、彼女を少しも愛していないと言った…少なくとも人の言う愛というものは、何も彼女に対していただいていた。しかし私は彼女を愛していた。もし、それによってやさしさや、一種の同情や、つまるところかなり深い尊敬が意味されるならば。

p.19, l.43 Elle était catholique et je suis protestant.

彼女はカトリックであり、私の方はプロテスタントだった。

p.20, l.77-80 J'imaginai…que nous avions seulement de quoi vivre

…je fus presque gêné quand je compris que nous possédions beaucoup plus.

私は、私達が生きるに足るだけしか持っていないと思っていた…私たちがはるかに多く所有しているとわかったとき、私は、困惑してしまったほどだった。

p.20, l.82-85 …je pris conscience un peu plus nette de ma fortune, mais seulement lors du contrat de mon mariage, et pour m’apercevoir du même coup que Marceline ne m’apportait presque rien.

…私は、自分の財産について今少しはっきりと意識したのは、夫婦財産契約のときやっとだった。そして同時に、マルスリーヌがほとんど何も持って来なかったことを知った。

p.20, l.87-91 … j’étais d’une santé très délicate… Marceline, au contraire, semblait robuste.

…私は、非常に繊細な健康をしていた。…逆に、マルスリーヌは健康そうにみえた。

p.20, l.89-90 La vie trop calme que je menais m’affaiblissait et me préservait à la fois.

私がおくっていたあまりに静かな生活が、同時に、私の体を弱くし、また維持していた。

(3) 分 析

同意であろうと反意であろうと、並置による語、句、文の頻出は、いったい何をあらわしているのだろうか。

はじめ、並置による相互性は、極端にどちらでもない中庸、あるいは均衡を示すかのように思われる。結婚式の食事は笑いもなく叫びもないおだやかな雰

囲気 (p.18, l.22)。友人達のすばらしさが、平凡な結婚式を感動的なものにする (p.18, l.19)。しかし、次の一文は妙に気になる。

p.18, l.20-21 L'on était ému et cela m'm'émouvait moi-même.

人々が感動した、そしてそれが私をも感動させた。

ミッシェル自身の結婚式ではないのだろうか。他者の感動が彼を感動させる要因となる。中庸あるいは均衡というより、彼の受動性を示すようだ。不均衡、不安定を感じさせる。

マルスリーヌとミッシェルの関係を見よう。

二人は、互いに何も知らないようだ (p.18, l.26)。愛情関係では、彼はマルスリーヌを愛していない。しかし他の女を愛したことがないのだから、幸福には充分だと彼は思う (p.18, l.34)。さらに、人の言う愛はいただいていないとしても、愛がやさしさや同情や尊敬と同義語ならば、愛していることと同じだとして加える (p.18, l.40)。何か全て言い訳にすぎないような結婚への不安が感じられる。二人の境遇も、孤児ということでは同様だが (p.18, l.37)、財力では逆であり (p.20, l.82)、まして宗教ではプロテスタントとカトリックである (p.19, l.43)。しかし、何故か司祭は彼を受け入れ、彼は司祭を受け入れる (p.19, l.44)。対句や並置される語が、何ら説得性をもたず、言い訳、単なる無意味な羅列に見える。

両親とミッシェルの関係を見よう。

ミッシェルは、若くして母を失なう。厳格な彼女の宗教教育も年とともにうすれている。母のイメージはきえてゆく。父は、彼女の死後、息子の教育に専念する。数々の言葉を学び、ミッシェルは学者として成長していく。が、父との関係が安定感のあるものかという点、そうでもないようだ。父の名で出版した論文が大成功を収めたとき、ミッシェルは、このペテンの成功に混惑する。父との関わりがペテンにもとづかれていたとさえいえる。父に対等の者とみなされ (p.19, l.59)、学者としての人生をおくる彼は、実のところ、廃墟と書

物以外ほとんど知らず (p.19, l.66), 異なる人生があることを知らずにいた。それはやはり安定ではなく、不均衡な不安定だろう。

同意であろうと反意であろうと、並置による相互性は、常に中庸あるいは均衡、結果としての安定を示すのではなく、むしろ受動性、プラスマイナスゼロといった否定の側面がはるかに強いようだ。父の学問上のこと以外でも、結婚も友情も“ペテン”にもとづかれている。さらに、友人達や妻のことを知らずにいただけでなく、彼自身のことさえわからなかったのだ。彼に関わる全て、そして彼自身も否定され無意味となってゆく。並置のメカニズムは、まさにこの否定の情熱を、むだのないほぼ完璧だろう文の中にしのばせていくトリックと思わせる。テキスト中、「…無しで: sans」は7回、「何もない: rien」は6回でてくる。この数は、少ないとはいえないだろう。

父の死後の人生を彼とともに生きるマルスリーヌは、虚弱なミッシェルと対立並置され、健康である (p.20, l.87)。そして、彼の過去の静かな生活が、同時に、彼の体を弱くし、また維持したと対立並置される (p.20, l.89)。対立も並置も、何かぼんやりとした不安をのこし、いずれ、読者が知るはずになるものを予告しつつ、物語は、新婚旅行へとつづいてゆく。

2. マニユスクリの分析

さて、以上のようなテキスト分析をふまえ、テキストとマニユスクリとの関わりについてみてみたい。前述の並置された語、句、文にするため、マニユスクリが書きかえられテキストとなったものも少なくはない。がまた、文体上の問題から書きかえられた部分も多い。それらの部分については、識者には笑止すべき面が多々あると思うが、何故書きかえられたかを、私の仏語能力の範囲内であえて類推してみた。さらに、単に文体をととのえるために書きかえられたものは、フランス古典主義のひそみにならい、漠然と明確化あるいは簡潔化: (style) clair ou simple と附記した。また書き言葉としての文章体への書きかえなどは、上品な文体ということで (style) soutenu とした。これら

も識者のご批判をうけることになるだろう。しかしいずれにしろ、あえて書きかえの理由を想像し、それぞれにつけてみた。

ページ数，行数は，拙論末のテキストのものである。始めにマニュスクリ文，次に矢印によりテキスト文を記した。マニュスクリ→テキスト。書きかえが2回以上あるばあい，最後の文がテキストとなる。マニュスクリで線などにより消された文，黒くおおわれたものもすかしていることで再現した。これらは，×印で示した。/×…/。

p.17, l.1 /× je savais bien votre amitié/

→ je vous savais fidèles.

simple et soutenu

p.17, l.2 comme je serais venu au vôtre → comme au vôtre j'eusse

accouru moi-même

→ tout comme j'eusse fait au vôtre.

simple et soutenu

p.17, l.3 nous ne nous étions revus

→ vous ne m'aviez vu

p.17, l.5 et vous fis accourir

→ …voyager

l.2 の accourus との同一動詞の再使用をさけた。

p.17, l.6-7 C'est pour m'entendre

→ pour que vous puissiez m'entendre

soutenu

p.17, l.8 parler

→ vous parler

clair

p.17, l.10 J'ai besoin /× ce qu'il faut faire/

→ J'ai besoin...

clair

p.17, l.11 Savoir se libérer /× est aisé/

→ n'est rien

aisé より rien で意味を強調。

p.17, l.12 je /× le ferais/ vais vous raconter

→ je vais vous raconter

臨場感。

p.17, l.12 très simplement

→ simplement

simple

p.18, l.16 que vous me vîtes

→ que nous nous vîmes

clair

p.18, l.18 où je venais de me marier

→ où mon mariage se faisait

→ où mon mariage se célébrait

soutenu

p.18, l.21–23 Un court repas sans rire, sans cris dans la maison de celle qui devenait ma femme, nous réunit encore au sortir de l'église; comme moi elle était orpheline /× aussi/ ses deux frères nous servaient de…

→ Dans la maison de celle qui devenait ma femme, un court repas sans rires et sans cris, vous réunit à nous au sortir de l'église; puis…

comme moi 以下は、テキストでは後に移動。そこで aussi は並置のため再出。

p.18, l.24 /× à celui du quai/

→ à l'idée d'un mariage

celui が受ける語がない。

p.18, l.25 /× d'un port ou d'une gare/

→ d'un quai de départ

soutenu

p.18, l.26 /×…et moi nous nous connaissions fort peu/

→ Je connaissais très peu ma femme

次のマニュスクリ文との並置のため。

p.18, l.27 elle me connaissait encore moins

→ elle ne me connaissait pas plus

前文と並置するため共に肯定文で否定をあらわそうとしたが, encore moins (さらに…ない) とする意味の根拠がないので, 文体を自然にするため, 否定文とした。

p.18, l.32 ce qu'était la vie

→ ce que pouvait être la vie

clair

p.18, l.33 sans joie grave, mais pour moi non sans douceur

→ sans rires, mais non sans grave joie

並置を明確にするため。clair et simple

p.18, l.34-35 Si je n'aimais jamais...ma fiancée, du moins n'avais-je

jamais aimé d'autre femme

→ Si je n'aimais pas...

jamais のくりかえしをさけるため。

p.18, l.36 notre ménage

→ notre bonheur

ménage では、あまりにそっけない。

p.18, l.37-39 Elle s'appelait Marceline; elle avait à peine vingt ans; mais j'avais quatre ans de plus qu'elle. Elle était orpheline aussi, et vivait avec ses deux frères.

→ Elle était orpheline aussi et vivait avec ses deux frères. Elle s'appelait Marceline; elle avait à peine vingt ans; j'en avais quatre de plus qu'elle.

simple, clair et soutenu

pp.18-19, l.40-41 n'avais-je pour elle pas d'amour

→ n'éprouvais-je pour elle rien de ce qu'on appelle

後述の文は次のようになる。

si l'on veut entendre par là de la tendresse, une sorte de pitié, enfin une estime assez grande.

したがって，“いわゆる愛と一般に呼ばれるもの”とした方が，直接“愛”よりきとう。

p.19, l.43 très grande

→ assez grande

soutenu

p.19, l.45 sans un trouble

→ sans impair

テキスト分析で述べたように並置のため。

p.19, l.47-48 n'ayant, par une sorte d'invincible pudeur de tous deux, jamais pu causer avec lui de ces choses

→ n'ayant, par une sorte d'invincible pudeur que je crois bien qu'il partageait, jamais pu causer avec lui de ses croyances

de tous deux から que je crois bien qu'il partageait は並置の強調。

ces choses から ses croyances は clair et soutenu

p.19, l.49 religieux

—huguenot

clair

p.19, l.49 tendre

→ belle

hugnot の厳格な教育から，やさしさの意を含む tendre はふさわしくない。

p.19, l.50 *lentement en mon coeur effacé*

→ *lentement effacé en mon coeur*

p.19, l.51 *Je savais bien encore*

→ *Je ne soupçonnais pas encore*

次の文と比較。

p.19, l.52 *quels plis elle laisse à l'esprit*

→ *ni quels plis elle laisse à l'esprit*

前文が否定の動詞に変わったため ni が必要。

p.19, l.53 /× *dont me donnant le goût/*

→ *dont ma mère m'avait laissait le goût*

dont の用法の誤まり。

p.19, l.57-58 *le grec*

→ *le latin et le grec*

l'hébreu, le persan et l'arabe

→ *l'hébreu, le sanscrit, et enfin le persan et l'arabe*

二つの言葉つつ並置

p.19, l.58-59 *je prenais mon plaisir à suivre pas à pas mon père et*

je pus bientôt m'associer à ses travaux

→ *Vers vingt ans j'étais si chauffé qu'il osait m'associer à ses travaux.*

主体を父 *il* の方へおくことで、ミッシェルの受動性を示す。

p.19, l.59 /× *dire/*

→ prétendre

soutenu

p.19, l.60–61 Le commentaire sur le loi de

→ L'Essai sur les cultes phrygiens

clair. 筆を入れるときのごく自然な具体化。

pp.19–20, l.66–70 ne connaissant rien de la vie /× que des livres/,

ayant usé sur le travail une ferveur singulière

— aimant quelques amis, il est vrai, mais plutôt l'amitié qu'eux-même; mon dévouement pour eux était très grand, mais c'était par désir de noblesse;

→ n'ayant presque rien regardé que des ruines ou des livres, et ne connaissant rien de la vie; j'usais dans le travail une ferveur singulière. J'aimais quelques amis (vous en fûtes), mais l'amitié qu'eux-même, mon dévouement pour eux était grand, mais c'était besoin de noblesse.

des ruines ou des livres は並置。

soutenu

p.20, l.73–74 l'idée que j'aurais pu être différente

→ l'idée que j'eusse pu mener une existence différente

soutenu

p.20, l.74 …différemment; /× après tout/ n'aurais-je pas choisi ma carrière? Non, c'était celle de mon père; je le connaissais, simplement. J'arrivai donc à vingt quatre ans, n'ayant regardé jamais rien que des ruines et des livres, ne réclamant du monde

extérieur que son passé. J'n' /× en/ apercevais /× pas/ rien du présent. Lui dire quelle étrange ferveur j'ai dû dévorer dans l'étude et mettais un facile orgueil à mépriser ce que je ne connaissais pas

→ …différemment. (後に続く全文削除)

全体として désordre を soutenu とするためと思われる。しかし, celle de mon père や je le connaissais, simplement は, ミッシェルの受動性を示し, ne réclamant du mende extérieur que son passé. Je n'apercevais rien du présent. はジッドの親しい主題である過去と現在を示し, 興味深い。

p.20, l.75–76 et à nous deux nous prenons si peu que

→ nous dépensions si peu tous deux, que…

soutenu

p.20, l.77 Je considérais

→ J'imaginais

soutenu

p.20, l.77 beaucoup

→ souvent

soutenu

p.20, l.78 simplement

→ seulement

p.20, l.80 lorsque

→ quand

p.20, l.81–85 …ces choses, que je ne pris conscience bien nette de ma fortune, non point lors de la succession de mon père dont j'étais unique héritier, mais lors du contrat de mon mariage, et **puis** m'apercevoir du même que Marceline ne m'apportait presque rien.

→ que ce fut même pas après le décès de mon père, dont j'étais unique héritier, que je pris conscience un peu plus nette de ma fortune, mais seulement lors du contrat de mon mariage, **et** pour m'apercevoir du même coup que Marceline ne m'apportait presque rien.

soutenu

puis を単に et に変えることで, que je pris conscience…nette de ma fortune と m'apercevoir…que Marceline ne m'apportait presque rien の二文の並置をより明確にする。

p.20, l.91 fut

→ fût

誤まり

p.20, l.92 tous deux nous apercevoir

→ savoir

simple

以上がマニュスクリとテキストの対比である。関わる人間と自己の境遇, そして自己自身を否定し, プラスマイナスゼロのメカニズムを並置の語, 句, 文の中に見出し, かつ全てが“ペテン”であるとするテキスト分析は, マニュスクリからテキストへの移行の中に散見する。しかしむしろ, 始めからジッドは, この文体を創りあげようとしたと思われる。このメカニズムの大方の文

は、はじめから書かれている。書きかえは、その方法にそって補足されたようだ。

《テキスト文》

プレイアード版, 「レシ, ソチ, ロマン」, pp. 372-374

PREMIÈRE PARTIE

I

1. Mes chers amis, je vous savais fidèles. A mon appel vous êtes
2. accourus, tout comme j'eusse fait au vôtre. Pourtant voici trois
3. ans que vous ne m'aviez vu. Puisse votre amitié, qui résiste si bien
4. à l'absence, résister aussi bien au récit que je veux vous faire. Car
5. si je vous appelai brusquement, et vous fis voyager jusqu'à ma
6. demeure lointaine, c'est pour vous voir, uniquement, et pour que
7. vous puissiez m'entendre. Je ne veux pas d'autre secours que
8. celui-là: vous parler. —Car je suis à tel point de ma vie que je ne
9. peux plus dépasser. Pourtant ce n'est pas lassitude. Mais je ne
10. comprends plus. J'ai besoin... J'ai besoin de parler, vous dis-je.
11. Savoir se libérer n'est rien; l'ardu, c'est savoir être libre. —
12. Souffrez que je parle de moi; je vais vous raconter ma vie, simple-
13. ment, sans modestie et sans orgueil, plus simplement que si je
14. parlais à moi-même. Ecoutez-moi:

15.

16. La dernière fois que nous nous vîmes, c'était, il m'en sou-
17. vient, aux environs d'Angers, dans la petite église de campagne

18. où mon mariage se célébrait. Le public était peu nombreux, et
19. l'excellence des amis faisait de cette cérémonie banale une céré-
20. monie touchante. Il me semblait que l'on était ému, et cela
21. m'émouvait moi-même. Dans la maison de celle qui devenait ma
22. femme, un court repas, sans rires et sans cris, vous réunit à nous
23. au sortir de l'église; puis la voiture commandée nous emmena,
24. selon l'usage qui joint en nos esprits, à l'idée d'un mariage, la
25. vision d'un quai de départ.

26. Je connaissais très peu ma femme et pensais, sans en trop
27. souffrir, qu'elle ne me connaissait pas plus. Je l'avais épousée
28. sans amour, beaucoup pour complaire à mon père, qui, mourant,
29. s'inquiétait de me laisser seul. J'aimais mon père tendrement; oc-
30. cupé par son agonie, je ne songeai, en ces tristes moments, qu'à
31. lui rendre sa fin plus douce; et ainsi j'engageai ma vie sans savoir
32. ce que pouvait être la vie. Nos fiançailles au chevet du mourant
33. furent sans rires, mais non sans grave joie, tant la paix qu'en
34. obtint mon père fut grande. Si je n'aimais pas, dis-je, ma fiancée,
35. du moins n'avais-je jamais aimé d'autre femme. Cela suffisait à
36. mes yeux pour assurer notre bonheur; et, m'ignorant encore
37. moi-même, je crus me donner tout à elle. Elle était orpheline aus-
38. si et vivait avec ses deux frères. Elle s'appelait Marceline; elle
39. avait à peine vingt ans; j'en avais quatre de plus qu'elle.

40. J'ai dit que je ne l'aimais point—du moins n'éprouvais-je
41. pour elle rien de ce qu'on appelle amour, mais je l'aimais, si l'on
42. veut entendre par là de la tendresse, une sorte de pitié, enfin une
43. estime assez grande. Elle était catholique et je suis protestant...
44. mais je croyais l'être si peu! le prêtre m'accepta; moi j'acceptai le
45. prêtre: cela se joua sans impair.

46. Mon père était, comme l'on dit, «athée», —du moins je le
 47. suppose, n'ayant, par une sorte d'invincible pudeur que je crois
 48. bien qu'il partageait, jamais pu causer avec lui de ses croyances.
 49. Le grave enseignement huguenot de ma mère s'était, avec sa belle
 50. image, lentement effacé en mon cœur; vous savez que je la perdis
 51. jeune. Je ne soupçonnais pas encore combien cette première
 52. morale d'enfant nous maîtrise, ni quels plis elle laisse à l'esprit.
 53. Cette sorte d'austérité dont ma mère m'avait laissé le goût en
 54. m'en inculquant les principes, je la reportai toute à l'étude.
 55. J'avais quinze ans quand je perdis ma mère; mon père s'occupa
 56. de moi, m'entoura et mit sa passion à m'instruire. Je savais déjà
 57. bien le latin et le grec; avec lui j'appris vite l'hébreu, le sanscrit,
 58. et enfin le persan et l'arabe. Vers vingt ans j'étais si chauffé qu'il
 59. osait m'associer à ses travaux. Il s'amusait à me prétendre son
 60. égal et voulut m'en donner la preuve. *L'Essai sur les cultes phry-*
 61. *giens*, qui parut sous son nom, fut mon œuvre; à peine l'avait-il
 62. revu; rien jamais ne lui valut tant d'éloges. Il fut ravi. Pour moi,
 63. j'étais confus de voir cette supercherie réussir. Mais désormais je
 64. fus lancé. Les savants les plus érudits me traitaient comme leur
 65. collègue. Je souris maintenant de tous les honneurs qu'on me
 66. fit... Ainsi j'atteignis vingt-cinq ans, n'ayant presque rien re-
 67. gardé que des ruines ou des livres, et ne connaissant rien de la vie;
 68. j'usais dans le travail une ferveur singulière. J'aimais quelques
 69. amis (vous en fûtes), mais plutôt l'amitié qu'eux-mêmes, mon dé-
 70. vouement pour eux était grand, mais c'était besoin de noblesse; je
 71. chérissais en moi chaque beau sentiment. Au demeurant,
 72. j'ignorais mes amis, comme je m'ignorais moi-même. Pas un
 73. instant ne me survint l'idée que j'eusse pu mener une existence

74. différente ni qu'on pût vivre différemment.

75. A mon père et à moi des choses simples suffisaient; nous dé-
76. pensions si peu tous deux, que j'atteignis mes vingt-cinq ans sans
77. savoir que nous étions riches. J'imaginai, sans y songer souvent,
78. que nous avions seulement de quoi vivre; et j'avais pris, près de
79. mon père, des habitudes d'économie telles, que je fus presque
80. gêné quand je compris que nous possédions beaucoup plus. J'étais
81. à ce point distrait de ces choses, que ce ne fut même pas après le
82. décès de mon père, dont j'étais unique héritier, que je pris con-
83. science un peu plus nette de ma fortune, mais seulement lors du
84. contrat de mon mariage, et pour m'apercevoir du même coup que
85. Marceline ne m'apportait presque rien.

86. Une autre chose que j'ignorais, plus importante encore
87. peut-être, c'est que j'étais d'une santé très délicate. Comment
88. l'eussé-je su, ne l'ayant pas mise à l'épreuve? J'avais des rhumes
89. de temps à autre, et les soignais négligemment. La vie trop calme
90. que je menais m'affaiblissait et me préservait à la fois. Marceline,
91. au contraire, semblait robuste, —et qu'elle le fût plus que moi,
92. c'est ce que nous devons bientôt savoir.